

し、第二には該授業を生かすことを通じて教授者その人を生かし、これを大成せしめ、第三には教授批評そのことに即して、自己（批評者）及び教育そのものを生かし助成するに在るのである。大きく言はゞ「人道」の發揮實現、そこに深き根底がある。

彼の感情にかられ、或は他に爲めにするところがあつて、専ら短所弱點のみを撞く如きは、眞の教授研究者のなすところではない。これらは教育者の風上にもおけぬものである。

第二章 教授批評の方法

第一節 感想批評法

批評の方法型式の一に、感想批評と呼ばれるものがある。これは嚴密には未だ批評と呼ぶこと能はざるものだが、廣い意味に於いて批評の一種として數へられてをるものである。

一、感想批評とは何ぞや さらば感想批評とは如何。これは所感的に批評することである。所感的に批評するとは、教授ならば教授に對して、直覺的に自己の感じたその所感を基として、その感じの立場からあゝのかうのと授業の長短得失を論ずることである。隨てこの種の批評は、雜感雜想的なるをその常例とする。

二、感想批評の特徴 かるが故に、感想批評には次の三き特色が附隨する。

- (イ)、批評に系統がない。隨て斷片的非論理的である。
- (ロ)、批評が主觀的・獨斷的である。中にも感情本位である。
- (ハ)、批評に深みがなく、著しく淺薄性を帯びてをる。

要するに主観的で非論理的で感情的で淺薄的でその言説が客観的價値に乏しいのがこの種批評の特徴である。故にそれだけ批評としても批評の方法型式としても貴からぬ譯である。併しながらそれかと云つて少しも價値がないとは言へない。何となればその直覺的な感想的な片言隻語の中にも、時としては大なる價値を包藏する場合もあるからである。中にも教育的素人の發する感想批評の中に、大いに他山の石とすべきものゝあることを吾人は度々見聞する。

三、教授批評の型式としての感想批評 上述の如きもの故、吾人は感想批評法を以て教授批評の正しき型式となすことは出來ない。眞實のところを言へば、感想批評をなす如きは、或る意味に於て、該教授者を馬鹿にしたことになる。教授者の心血をそゝいだ教授に對して、藪から棒の感想批評に依て、折角苦心の教授の價値を問はれてたまらぬものでない。

第二節 超越的批評法

一、超越的批評法の意義 これは或る點に於ては感想批評にまさつてをるが、或る點に於ては感想批評の域を出でないものがある。超越批評とは、被批評者の立場や着眼や苦しみを考慮せず、勝手な自分自身の立場に立て、無理解無同情的に批評をおこなふことである。それ故、この種の批評は、次節

に述ぶる内在的批評とは、著しくその性質を異にする。要するに教授批評に於てなれば、教授者の立場を考慮しない獨斷的な批評、それが超越批評だ譯である。この種の批評は、結局は水掛論となる。

少しく前節に述べた感想批評と比較するに、とにかく自己一流の教材觀を有し、教授目的を立て、方案準備をもつて教授批評に望む點、そこは感想批評とは異なる。感想批評は多くの場合何等の自己案や計畫や研究を持たないが普通である。然るに超越批評はこれを持つてをる。この點感想批評よりは優つてをると言へる。併しながら一面に於いては、感想批評と全く性質を同うするものがある。それは何かと云ふに、被批評者の立場や事情を考慮せず、獨斷的に主我的に、批評をおし進めていく點である。

二、超越的批評の特徴 超越批評の特徴には、次の如きものがある。

(イ)、批評の基調が主我・獨斷にあること。

(ロ)、批評が一人よがりになり往々的を外づれること。

(ハ)、研究會が結局に於いて水掛論に終ること。

さりながら超越批評と雖も全然無價値とは云へない。その譯は、各人皆個性を有し關心を異にするところから、同一の教材學習に當つても、その價値の高下觀を異にし、また教授上の見解を異にし

て相容れざる場合のあること決して尠くなく、換言すれば同一教材の教授に對して、二種以上の教授見解を生じ、隨て一は他に對して、これを衷心より尊重してその意見を聽かざる可らざること往々あるからである。超越批評は、原則として、この異なる見解に立つものと見做すことが出来るのである。就中、教育の根本原理や、人生觀・世界觀と云ふやうな問題になると、甲乙丙丁相一致しない場合が甚だ尠くない。

三、教授批評の型式としての超越批評 教授の批評型式として、超越的批評法はいかばかり價値を有するであらうか。余の言を俟つまでもなく、眞の教授批評は内在的批評法であらねばならぬ。感想批評法や超越批評法では十分でない。超越批評法は、教授者の立場や事情を考へないで、自分の勝手な立場から勝手な批評をするのであるから、實は被批評者にとつては、迷惑千萬な話である。單に同情をもたない位ならまだ我慢も出來やうが、見當違ひの批評や考へてもをらぬ他事に對してまで批評されては、これ位割の悪いことはない。またはたで聞いてゐても氣の毒なことである。超越批評には時々さう云ふことがある。

第三節 内在的批評法

一、内在的批評法の意味 前にも述べたる如く、眞の批評は内在的批評であらねばならぬ。隨て教授批評に於いても、これ亦内在的批評を以てその最上のものとなさねばならぬ。

内在的に批評するとは、如何やうに批評することであるか。曰く、自己自身被批評者即ち教授者の立場に身を置き、出來るだけこれに同情・感を持ち、いつもこの内在的關係を忘れず、教授者の立場に即して、以て教授の立案なりその實際なりを批判することである。尤も、自分と他人とは全く一致することは出來ないのであるから、この點よりすれば完全内在批評など云ふことも、或は嚴密には不可能かも知れない。しかしながら或る程度までは、可能でもあるしまた是非さう在らしめねばならぬのである。

批評者が、この内在的立場に立ちて、はじめて善かれ悪しかれ被批評者の教授立案並びに實際を理會しこれに同情を持ち、かくて誠意のほとばしる眞實の批評をなすことが出来るのである。隨て、被批評者も、衷心から感謝して批評者の批評を聽くことが出来るのである。

二、内在的批評法の特徴 感想批評、超越批評にそれぞれ二三の特徴があつたやうに、この内在批評にもいろいろ々の特色がある。就中その主要なるは、次の如きものである。

(イ)、内在的にして客觀的なるが故に、私見に捉れずまた無理解非同情的な批評より免れ得るこ

と。

(ロ)、教授の計畫から實際へまで全般に亘つて論理的な批評をなし得ること。

(ハ)、批評者の批評と被批評者の反駁乃至補説とが相俟ちて補合的によりよき教授がその中から生み出されること。則ち批評の本義たる價值創造がかくて實現される。

(ニ)内在的立場に立つが故に水掛論とならず。

とにかく、批評の目的たる價值創造は、この内在的批評法に依てのみ、はじめて可能なることは疑へない。またその價值創造たるや、個人主観的・獨斷的の域を離れて、真に客觀的たることを得るのである。また、被批評者に對しても、惡感情をいだかしまないで済む。自分としては、かゝる批評をなすことに依り、自づと自己を深め高め、自己創造と云ふ一面も營み得ることになる。

三、内在的批評の方法 感想批評や超越批評は、割合に無責任で、その批評としての價值も低く、いとところから、容易に誰にも出来るが、真に内在的批評をなすことはなかなか難づかしいことである。批評としての價值が高く、責任を要するだけ、それだけ批評にも骨が折れる。これはやむを得ない。

内在的批評を試みるには、第一に教授者の立場を十分に理會しなければならぬ。こゝに立場と云

ふのは、教授の立案計畫乃至實際を演ずるに當つて、彼れの此の立案計畫實地に何等かの制約又は條件をなした一切の事情である。その中にて重要なものは、兒童側の事情、社會の事情、教師側の事情、過去學習(教授)上の事情である。批評者は批評を試みる以前に於いて、これらのことに關して十分にその教授背景をあきらかにしておかねばならない。

上述の背景乃至立場を理會しておくことは、獨斷的な超越批評に陥るのを免れたためである。蓋し、教授者の教授の立案や實際は、この種の背景乃至條件に依て制約を受けて現出せしめられたものだからである。則ちこれを批評するにも、これらの諸條件を心において批判せねばならぬ所以こゝに在る。これを忘れると超越批評となるのである。

第二には、教授者の立案計畫が、果して正常適切であるか、これを檢査することである。無論これを檢査するにも、前に述べた立場・事情・條件を離れて、自分勝手にさめる譯にはいかない。よく事情・立場に即して(内在して)その正否當不當を檢査せねばならない。

立案計畫の中には、教材觀に關するものと、教授目的に關するものと、教授方法や準備に關するものがある。教材觀に關するものとしては、該教材の使命の何たるかを真に捕捉したかどうか。また教材の要素中、主副輕重の關係を十分に誤りなく捕へたかどうか。また彼れの立場から考へて、彼れ

の授けんとしたるその程度が、果して彼れの兒童の能力社會の要求等に、ビタリと合致したりしか否か。それらのことがらに關して精細に檢すべきなのである。

次に、教授目的につきては、彼の思念したる目的が、果して彼の立場や事情から考へて正しかりしや否や、目的中の重要目的と副次的目的とが、それ〴〵整合を得てをつたかどうか。思念の中に入るべき目的にして、打ち忘れたるものがなかりしや否や、等檢覈すべきなのである。

教授の方法や準備に關しては、その計畫したりし方法が、果して目的實現上最上必至のものなりしか否か。また、準備中、教授者は教材につきて十分に研究を仕遂げてありしか否か。教便は教授を完全に遂行するに不足不十分不完備のものがなかつたかどうか。それらを檢すべきである。

以上は、教授の立案計畫に對する批評の着眼點であるが、他にその實際の方面即ち實地授業そのものにつきても批評の對象を求めねばならない。この方面に於いて注意すべきは、實際が果して立案計畫の通りに進行せしや否や、進行せざりしとすればそれは何故なりしや、教授中の突發事件に對して、教授者のとれる處置は正しかりしや否や、また教授者の教授術は。間然するところなかりしや否や、態度・教授・板書法・用語・教便物の使用法、發問法や兒童答辯の處理法等は如何なりしや、これらの件も檢覈すべきである。

最後に、教授(學習)の結果(成績)について檢覈の眼を向けなければならぬ。この場合の重要關心事は、果して最初の豫期が達せられたかどうか。と云ふことのそれである。達せられたとしたならば、それは立案計畫の當を得たためか、それとも中途に於ける臨機應變の處置の當を得たりしたためか、そのことを檢せねばならぬ。

反對に、若し不結果に終りし場合には、その何のためなりしか原因を探ぐり、その學術的考察を試むべきである。

また、假りに、その日の教授が失敗に終つたとしても、その場合には單にこれを失敗として棄却することなく、更に次に來るべき教授と關連せしめて、その取返しを如何にせんとするか、そのことまでも教授者に質し、ともに研究を進むべきなのである。

第四節 教授批評上の注意

一、教授批評の標準如何 教授を批評する際に、法るべきその標準は如何。一般論としてならば、それは言ふまでもなく眞・善・美の相融合したる状態であらう。換言すれば理想の教授であらう。隨てこの絶對標準より判定するときは、眞・善・美中の何れか一要素たりとも、これを缺如するところの教

授ならば、十分のものと見做すこと出来ない譯である。而してかゝる教授は到底現實のこの世に在るべしとは思はれないのであるから、吾等は如何に努力するも、教授の完全はこれを期することは不可能である。と云ふことにならねばならぬ。

翻て、吾人は、相對的なる意味の教授批評として、先づ第一にいかなる状態のものを要求したらよいであらうか。余は「眞」なる教授を要求する。眞なる教授とは、論理的に見て間違のなき教授である。正しき教授である。教材觀も教授目的觀も教授準備も方法も教育教授の理に適ふが如きものである。かゝる教授は、多くの場合、善と美との要素をも伴ふものである。而も未だ必ずしも善盡し美盡せりとは云ふことを得ない。

善盡し美盡さざるも、吾人は間違ひのなき教授を以て、現實に於いて一應立派な教授として見做さねばならぬ。故に教授批評等に於いては、何を措いても先づこの「眞」性を教授に要望せではゐられない。

第二には何を望むべきであるか。余は「善」を要求する。該教授がいかにはでやかに進められても、その本質に於いて「善」性を破壊するかまたはその發揮を妨害するが如きものであつては、教育の目的から考へてこれを肯認するわけにはいかぬものである。「眞なる教授」である上に善なる要素が加は

る。現實においては上等の教授と云ふべきであらう。

第三には「美」的要素の附加である。眞であり善であり、その上に美である。これ最上の理想教授である。

二、教授批評の順序 凡そ何事をなすにも順序と云ふものがあるが、教授批評においても順序がある。それは如何なるものかと云ふに、一言にすれば「根本から末梢へ」の順序である。これ論理的な批評に缺く可らざる自然の順序である。世の批評會を観ると、多くは根本末葉の嫌ひなく、手當りばかり偶感的・箇條書的になすものが多い。しかしかゝる批評の仕方は、十分なるものとなすことは出来ない。

根本から末梢への批評法は、余が前節に述べたる如くに、身を内在的の立場にあきながら、先づ教材觀の正否を検し、次に目的觀の常不當を考へ、この二者を基礎としてその上に立つところの教授方法なり、準備なりを批評するのである。そして最後にこれらの教案と對照しながらその實地を判定するのである。それらの間の言説の進め方は、内部關係的に論理的になすべきことは言ふまでもない。

また、批評の仕方には、歴史的・理論的・實際的の三種あるものだが、本當の批評はこの三者を巧みにとり用ひねばならぬものである。歴史的批評とは、對象の歴史的價值をあきらかにするものであ

る。例へば前人未發の業績(學說等)であるてふ如き場合には、それが果して然るや否や、史實に徴してこれを判定する。これが歴史的方法である。理論的批評とは純理的の學術批評、實際的批評とは實際上の便不便利得失を標準としての批評である。理論的批評と實際的批評とは、普通の教授批評に於いても採用されねばならぬ方法である。

三、批評者の資格及態度 眞の批評は井戸端會議に於ける安奥さん連の世間品評とは違ふ。極めて嚴肅なる仕事である。隨て批評者に一定の資格のあるべきことは言を俟たない。先づ教授批評につきて論ずるに、苟も他人の教授の價値を問はんとする者は、いくら安く見積つても、その被批評者の有する程度以上の教養や經驗を持たなければならぬ。さうでなければラテンデ批評らしき批評は出來ない筈だからである。この意味に於いて、同資格以上者・同學年擔任者は、より多き批評資格を有することになる。

一般的に言ふならば、教授批評者は、一定の教材に關する知識技能を有する以外に、教育學・教育哲學・教授訓練法、豊富なる實地經驗、並びに充實したる體験を持つ必要がある。また内容的に言ふならば眞・善・美・聖・利・健等の價値につきて明確なる觀念をもち、併せて教育價値のことを辨へて置くことを必要とする。さうでないといふ内容的に學習指導の正否得失を批評することは出來ない。價値の

ことを教ふるは哲學である。哲學を師範學校に於いて課することの必要こそ、に在る。

批評者のとるべき態度は、人道主義者の態度であらねばならない。愛(人間愛價値愛)と熱と誠實とを基礎とした、文化的戰士の態度でなければならぬ。批評の目的たる價値創造の如きは、自らこの中から生れて來る。彼のみだりに教授者の非を難じたり、或はこれを罵詈訕笑したりする如きは、これあきらかに教授批評者の態度ではない。さうかと云つて反對にお世辭を言ふことも、態度としては不可である。愛に發出したる卒直と嚴正、これこそ教授批評者の態度であらねばならぬ。

四、過程か結果か 世の教授批評者中には、學習(教授)の結果にのみ眼をそ、いで、その依て來る過程を問はず、専ら結果本位に教授の方法價値を規定せんとする者がある。これは果して正しき批評法であらうか。

余の言を俟つまでもなく、結果の方面から教授の當不當を檢することも、一種の批評法たるを失はぬ。併しながらこれを唯一の價値批判の根據とするには賛成されない。何となれば所謂教授學習の結果なるものは、單にその日の教授法の如何のみから將來さるゝものではなくて、これには種々様々の原因が働いてをるからである。換言すればその日の教授結果なるものは、複合因の然らしむるところである。然りとせんか、結果のよいてふことは、教授法以外に他の原因が働いてこれをよからしむる

こともあり、反對に悪いてふことは、他の原因に依て悪からしむる場合もあり得るのである。かうなつて來ると、結果のよいわるいと云ふことは、必ずしもあてにならぬことになり、吾人はこれのみに依て教授を批判することは出来ない。と云ふことになる。

余の見解を以てすれば、それなる教授法の價值判定は、結果等に依て出来るものではない。結果本位に價值を問はんとするは、プラグマチズムの致すところである。誤りたるを免れない。

翻て、何を以て教授法の價值批判の標準とせんかと云ふに、それは教授過程の論理的整合を措いて他には求められない。教授過程の論理的整合とは、該教授の進程が、その中に論理的の整合をもつてをるかどうか。反對の方面から言へば、その計畫なり教案なりの中に、矛盾した二觀念が含まれてゐないかどうか。それを吟味することに依て、その教授の價值が問はるべきである。とかく言ふのである。而して論理的整合を得てをる教授過程の中からは、必然によき學習結果が將來さるべき筈なのである。尤も他の原因に依て將來されぬ場合もあらう。

上述の如くに見て來ると、教授の價值はその過程の中に既に宿つてをる。と云ふことにならねばならぬと思ふ。

【参考】 教授の批評（槇山榮次氏）

【一】批評の意義 教授法の實際的研究として殊に肝要なるは、實地の教授に對して批評を加へることである。批評をなすには、先づ批評其のものゝ何であるか明かにしなければならぬ。批評とは善惡・美醜・正邪・利害（得失）を判定することである。さうして批評せらるゝ事項は必ず多少疑問と成り得るものである。誰が見ても一目瞭然たるもの例へば雪を白しと云ひ墨を黒しとするが如きは批評と成り得ないのである。批評は容赦なく人を難じ激烈に事を論ずることがあれども、非難の底に眞面目があり、論争の後には感情の平和と正直とが存在すべき筈のものである。これを以て彼の私情の爲めに支配せられ又は爲めにする所あつて行ふ所の罵詈訾笑又は詔諷お世辭と一視するのは大なる誤である。批評は自由であるけれどを放恣ではない。其の行はるゝや必ず據つて以て標準とする所の規範がある。批評を以て醜惡不正に對する論争に過ぎないと云うてをる學者があるけれども、それは批評の一面のみ觀察した意見であつて全體を見通したものでない。批評は醜惡不正を否認すると同時に善美と正理とを承認するものである。

【二】批評の種類 批評は其の性質に従つて次の如く分類することが出来る。

（一）道徳的批評 道徳的見解に依り人の性格及び其の行爲に對して加へらるゝ批評である。昔孔子が其の弟子を導くのに多く道徳的批判を以てした。子貢が孔子に對して師と商と孰れが賢であると問ひたるとき、孔子答へて師は過ぎたり商は及ばすと云うてあつた。そこで子貢は更に問うてそれは師の方が優つてをりますかと云うたが、孔子はこれに答へて過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しと云うたが如きは人物の批評を指導したものである。

（二）美的批評 美の趣味に依り自然の美及び人工の美に對して加へらるゝ批判である。人工の美に對して加へらるゝ批評は藝術の發達にし對て重要な働を爲すものである。批評あるが爲めに藝術の進歩を見ることが出来るのである。

（三）科學的批評 事實の正否に對する批判であつて正しく確認すること及び事實より導かれた思想に對し論理的に證明することの爲めに行はれる。即ち正しからざる事實又は思想に對してはこれを否し論争し、これに反して其の正しき事實又は思想に對してはこれを承認し確定するものである。例へば地軸説はコペルニクスに依つて否認せられ、重力説はニュートンに依て確認せられた。

(四) 實際的批評 事物の利害得失に關する批評であつて、實際的價值を定むる爲めに行はるゝものである。例へば茲に一つの茶碗があるとして其の使用に便利であるか、又は其の價に比して徳用であるかどうかと云ふを評定したならばこれは、實際的批評である。

道徳的批評と美的批評とは主として感情に基くものであるが、科學的批評と實際的批評とはこれと其の趣を異にして理性に依つて行はれるものである。(中略)

〔三〕批評の必要 批評は人間の活動に極めて必要なものである。批評あるが爲に進歩があり改善がある。若し何等の批評も加へらるゝことが無かつたならば刺激もなく興奮もなく人間の活動は器械的に同一事を反復することゝ成るであらう。批評は單に批評せらるゝものゝ進歩を促すばかりでなく批評する當人に取ても有益なるものである。批評は一種の判斷である。物を判斷する能力を有つてをすることは人間の動物に超越する所以の一つであるから、此の能力を發揮することが肝要である。正しき批評を爲すが爲には精確なる知識と高尚なる感情となければならない。それであるから正しき批評を爲さんと努むるものはそれに依て自己を修養するの益があると云ふことになる。

〔四〕教授の批評 一般批評の性質及び價値は以上述ぶる通であるが、然らば學校に於て行はるゝ教授の批評は如何なる性質のものであるかと云ふに、それに對して唯だ一概にかうであると答へることが困難である。何となれば教授の仕事は甚だ複雑であつてそれに對する批評もまた多様でなければならぬからである。若し其の批評が教授の目的に向つて加へられ、斯かる方針を探るの宜しくない。斯く目的を立つるは誤てをると云うたならば、それは正否を批判するものであつて科學的批評である。若し又其の批評が教授の材料に向つて加へられた時には、其の材料の性質に従つて或は科學的批評とも成り、或は美的批評・道徳的批評等とも成るのである。然るに教授の批評は目的又は材料に向つて加へらるゝことよりも狹義に於ける其の方法に對して加へらるゝことが多い。方法に對する批評は教授の作用が其の目的を達するに適應するや否やを評定するものであるから、利害得失を考察する實際

的批評であるとする方が適當である。方法の得失はそれに依りて生ずる結果の如何に依りて定むべきものである。力を費す と比較的少なく、而かも其の結果の見るべきものがあるとすれば、これを以て良好なる方法であるとしなければならぬ。即ち教授の批評は其の結果の如何を以て標準としなければならぬ。幾ら話の仕振りが巧妙であつても、如何に兒童を悦ばせ參觀人を悦ばせても、其の結果が空虚であるとしたならば良き教授であると評することは出来ない。これに反して幾ら見た體裁がわるく、はえの無い教授であつても其の結果が宜しければこれを良き教授と評すべきである。勿論教授の結果は他の仕事の如く明確に測定することの出来ないものであるから、これよりして精確なる批評の規程を得ることは困難である。所謂實驗教育學の研究に依つて教育教授の結果を科學的に明かならしめんとする努力が盛んであるけれども、未だ教育教授の活動に對して「規程を與へるまでに進んで」ない。それであるから教授の批評は經驗的に特に推究的に其の結果を考察して行ふより外に仕方が無い。

他の一般の批評に等しく教授の批評に在つても宜しく無い教授法に對し忌憚なく批評すべきは勿論であるけれども、併し非難の底には誠意があつて徒らに嘲笑を爲し諧謔を爲す者でないことは批評の本質として具へなければならぬ條件である。即ち批評者の心中には批評を受ける者をして誤れる方法を改めしめんとする好意が無ければならない。此の好意がなくて徒らに非難のみ加へるのはこれ破壊的批評と稱すべきもので眞の批評とは成らないのである。併し斯様に云うたからとて、批評には消極的に否認することの外必ず積極的に示す所なかるべからずと云ふのではない。換言すれば或る教授法を否認したからと云うてこれに代るべきよりよき教授法を必ず示さなければならぬと云ふのではない。何となればこれに代るべき優りたる方法を見出すことが出来なくとも而かもこれを否認しなければならぬ場合が少くないからである。縱しこれに代るべき良法があると考へても、それは批評者のさやうに信ずる迄で未だ確かなるものでないから、これを示すより寧ろ被批評者をして自ら考へしむるを可なりとする場合が少くない。批評は廣くこれを見た時には人を指導する一方法たるに過ぎないけれども、細かに考察すれば指導とは稍と其の性質を異にするものである。指導者は被指導者より先輩たるを要し、其のこれに對する態度も優者の劣者に對し長者の幼者に對する態度を

以てすべきものであるけれども批評者はさうで無い。被批評者を以て己と對等の資格を具ふるものとし相互研究の形を以て批評すべきものである。それであるから單に其の缺點を指摘するに止め被批評者をして更に自ら工夫して其の缺點を補充せしむるやうに仕向くるを可なりとする場合が少なくない。批評は元來相互研究の場合に用ふべきものである。附屬小學校の主事が教生の授業を批評し視學が教授を批評するが如き其の實は指導であるけれども批評の形を以て意見を表はした時にはこれを受くる者をして自重の念を起さしめ、其の効果が反つて大であるから此の形を採るのである。批評は指導と異なつてをるから必ずしも積極的方法を指示するものではない。併しながら、被批評者をして成功せしめんとする好意に至つては敢て指導と異なることは無い。

〔五〕批評者の具ふべき條件　そこで次に考ふべきは批評者の具ふべき條件である。繪畫の評を爲すもの必ずしも自ら畫くの技能を有してをる者では無い。演劇を批評する者音楽を批評する者必しもこれを演ずるの手腕あるものでは然い。繪筆を手にしたるごとく巧みに繪畫の批評を爲す者もある。批評者は必ずしも被批評者と同等以上の能力を有するに及ばない。併しながら、前に述べた通り批評を爲すには其の規範とする所が無ければならない。さうして此の規範は自ら經驗することに依つて確實と成るものであるから、批評者は被批評者の活動に對し多少の經驗を有することが必要である。美的批評を爲す場合などには美の感情即ち趣味を規範とするが爲めに美を賞玩する能力さへあれば批評を爲し得る譯であるけれども、教授の方法を批評する場合はさうでない。其の規範は教授の結果を推定することに依つて造らるゝもので、其の結果の推定は批評者自身の經驗に待つことが甚だ大である。單に理論的に結果を推定することも亦爲し得ない譯ではないけれども、前にも述べた通り、教育教授の理論的研究は今日の所確實に其の結果を推定し得るほどに進歩してをらない。余の見るところを以てすれば各自が爲したる實地の經驗こそ教授の方法に對する批評の規範を造るのに好適してをるものである。それであるから教授の批評を爲す者は少なくとも多少の經驗を有し居るの必要がある。併しながら、教授の目的又は其の材料に對する批評の如きは必ずしも教授の經驗を有するの必要が無い。單純なる理論的見解より爲し得るものであつて、其の批評者は必ずしも教育者たるに及ばない。純然たる學者又は局外者と雖正しき批評を爲し得るのである。

これを要するに批評者の備ふべき條件は批評の規範を正しく造り得るの事情を有してをることである。

〔五〕教授批評の形式　教授の批評は種々の形式に依つて行はれる。これを其の範圍に就て分けて見るときには、概評と各評との二種類とすることが出来る。概評は各部に通ずる抽象的の表出であつて、例へば今の教授は「しまりの無い教授であつた」とか「面白い教授であつた、併し結果が疑はしい」とか「注意周到であつた、併し餘りに緊張してをつた」と云ふが如きものである。これは各部分の批評の前に行ふこともあり又後に行ふこともある。多くの場合に於ても細い批評を終へた後行ふ方が適當なやうに思はれる。各評は各部分に就きて一々批評することもあり、又は或る部分のみを批評することもある。今其の部分を擧げて見れば(一)教室及び用具。(二)生徒。(三)教師。(四)教材。(五)教授の方法。(六)教授の効果である。

教授の目的に對する批評は全體に關するものであるから概評に屬するものとした方が適當である。教授の批評を其の順序に關して分けて見るときには系統的排列を採るものと適宜の排列に従ふものとの二種類とすることが出来る。系統的排列を採ると云ふのは、例へば教室及び用具より始めて生徒教師教材及び教授の方法に及び、最後に概評を爲すが如きものである。批評をして餘りに窮屈のものたらしめざるやうにするには、形式に拘泥せずして適宜の順序を採つた方が宜いやうに思はれるが、併し順序の錯亂して要領の徹せざるが如きことの無いやうにしなければならぬ。

批評は相互研究の方法として用ひらるゝものである。さうして相互研究の目的を達せんとするには、批評者の不眞面目ならざると同時に被批評者も亦十分なる誠意を以てこれを受取らなければならぬ。稱揚せらるゝよりも強く非難せらるゝ方が反て自己修養の良藥であると云ふことを考へて、襟度を廣くしてこれに接すべきものである。但し批評者が確に誤解したと認めらるゝ事柄はこれを辯解しなければならぬ。一旦受ける批評は十分にこれを考慮し探るべきはこれを探り。革むべきはこれを革むるやうにすることが必要である。斯くの如くにして相互研究はよく其の目的を達し得るのである。

これを要するに批評は實地研究の方法として極めて大切なものであるから、相互の間にこれを適用して教授法の進歩改善を圖

らなければならぬ。徒らに多くの教育書を読んで多くの學說を誦込むことよりも、批評的研究を爲す方が寧ろ有益なるやうに思はれる。批評的研究をするには批評者も被批評者もよく批評の性質を會得して、誠意を以てこれを爲し誠意を以てこれを受くるやうにすべきこと前に述べた通りである。(新教授法の原理及實際)

教授學習法講義 畢

大正拾五年 壹月十五日印刷
大正拾五年 壹月十八日發行

文檢
受驗用
教授學習法講義

正價金 五圓

教育學術會代表者

著作者 渡部政盛

東京市神田區表神保町七番地

發行者 阪本眞三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 吉田松次

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍



發行所

東京市神田區表神保町七番地
振替貯金口座東京八七二二番

大同館書店

大 同 館 發 行 書 目 錄

仲原善忠著 理法 研究 日本地理原論及細說 全一冊 正價四圓八拾錢 送料十八錢	栗原寅治郎著 大日本國勢地理 全一冊 正價三圓八拾錢 送料十八錢	栗原寅治郎著 日本產業地理精說 全一冊 正價金四圓 送料十八錢	栗原寅治郎著 郷土地理の研究 全一冊 正價金貳圓 送料十二錢	栗原寅治郎著 教材 改造世界地理精說 全一冊 正價五圓八拾錢 送料十二錢	德重淺吉著 史眼 養成國史教授の原理實際 全二冊 上卷 金參圓五拾錢 下卷 金四圓五拾錢 送料各十八錢	德重淺吉著 經濟的國史教授原義 全一冊 正價金貳圓 送料十二錢	栗山周一著 最近 史潮歴史教育の根本革新論 全一冊 正價貳圓八拾錢 送料十二錢
---	--	---	--	---	---	---	--

◇源氏物語の理想的新釋・文檢受験研究必讀書◇
◇小林榮子女史新著◇ (不朽の名著 苦心の大作)

大新好刊 源氏物語活釋

(全部完成) 前篇 (九百頁) 正價金四圓八拾錢 送料十八錢
後篇 (九百頁) 正價金四圓八拾錢 送料十八錢

全篇漢字をあて、講義に代へ頭註又精を極め粹を究む

この書を読む人は到底行はれざる源氏物語の全講を居ながら聴くと共に又中古國語辭典を座右に備ふるの効果を收め得べし加之も本書の一大異彩として著者が研鑽の餘「紫式部の源氏物語は雲隠までなり」との斷案を下したる事と紫式部日記の抄録講義(後篇に附す)によりて式部が撰々たる公子貴女を靜観せるさまの羅知たるを見るべし日本國民として此書は是非一讀せられん事を切に希望す。

桐壺：簪木：空蟬：夕顔：若紫：末摘花：紅葉賀：花宴：葵：實木：花散里：須磨：明石：潘標：蓬生：關屋：繪合：松風：薄雲：朝顔：少女：玉鬘：初音：胡蝶：螢：常夏：篝火：野分：行幸：藤袴：眞木柱：梅ヶ枝：藤末葉：若葉上：若葉下：柏木：廣笛：鈴蟲：夕霧：幻：雲がくれ：匂宮：紅梅：竹川：橋姫：椎木：總角：早蕨：寄生：東屋：浮舟：蜻蛉：手習：夢の浮橋(附録) 紫式部日記抄

(註釋に附て) 本書の頭註は煩多な古註の中から首肯し得るもののみを採擇して漢書佛典故實に照し考へ謬見と思ふ所もしくは古人の言及せぬ不明の箇所を解決し 禪家の謂ゆる活釋の意に背かぬもの と自信して爰に世界に誇るべき日本文の精髓源氏物語を一般人士に推奨いたします。本書は亦初めて古文に面接する人にも直ちに堂奥 源氏物語を了解することが出来ます

東京市神田區 表保町七番地 大 同 館 發 行 振替貯金口座 東京八七番

《(書讀必者驗受史洋西檢文)》

中等學校教授用資料と檢定受驗用とを兼備せる唯一の西洋史參考書

小林博氏新著 (多年苦心の大著愈完成發賣)

新刊 文部省檢定 西洋通史

西洋史研究の精華を十分に分説する

(菊判最上製美本) (上卷) 正價金六圓八拾錢 送料廿七錢
(全二冊箱入千五百頁) (下卷) 正價金四圓八拾錢 送料十八錢

- (一) 教授用の便
文部省教授細目と著作・村川・瀧川・大類・磯田・齋藤・清・峰岸・齋藤一の各博士教授の著せる中等學校西洋史教科書を參照し其項目の敷衍につとめ且説話筆記等の取扱にも苦心したり。
- (二) 受驗の實經驗
文檢受驗は著者の苦き實經驗に鑑み選擇配列に頗る苦心して表解圖點を施し極めて多き參考史話を載せ其の興味を以て讀者の倦怠を防ぎたり。故に本書は項目體にして見易く時間を省き願裡に千萬の史實を牢記せしむるは信じて疑はず。
- (三) 記事の詳密
著者は多年の西洋史研究と共に翻譯の史實を本書に發表しツタンカーメン王の事蹟よりドリス案日露交渉の最近に及び繁簡の要を得たれども尙記事頗る詳密にして多大の頁を費し從來の文檢問題の如きは自ら悉く繰込まれたり。
- (四) 文檢問題解答
本書は卷末に索引を附して讀者研究の便を計り既往の文檢問題は四十一回迄列記し一々之に解答を附したり。

東京市神田區 大田行發館 ■ 振替貯金口座 東京市神田區 表保町七番地

超・群書の中白眉としてしむ

お待兼の大同館發行國史實際用教授書出來!!

◆ 栗山周一・富山正義共著 ◆ (初版忽ち賣切再版)

新文化 高等小學國史教授の要訣

菊判最上製美本 全壹冊七百頁 正價金 五圓八拾錢 送料十八錢

新制定高等國史現るゝや、その解説的著述は随分澤山に出版せられた。然し何れも機を争ひ營利を目的としなないものはない。殊に杜撰なる叙述に依て書き擲つたやうなものも随分ある様子である。著者栗山氏は歴史教育の理論家として更には歴史教授の文學法の提唱者として新界既に充知の事であり富山氏は新しき教育實驗場たる兒童の村小學校の調導としてその豊富なる材料を實際的方面に活躍せしめて居る。如斯理論的方面にも實際的取扱にも十分なる研究と努力の結果生れたものであるが故に本書は蓋し教材解説の豊富なる點に於て記述の親切なる點に於て更に史料の正確なる點に於て群書中の白眉である敢て一本を薦む。

(内容目次) 第一篇國史教育論：第一章緒論：第二章歴史教育論：(歴史の教育的意義：新教科書の批判及取
念：餘論)：第二篇國史教授の實際、教材の解説：(目的)：教材：教授細目及教案：教授の實際：歴史教授と年代觀
の振興：第五朝鮮半島の服と文物の傳來：佛教の渡來と美術工藝の發達：第七支那との交通：第八大化の改新：第九
九東北地方の開拓と朝鮮半島の離反：第十律令の判定：第十一奈良時代の學藝風俗：第十二奈良時代の佛教：第十三
平安時代初期の發展：第十四藤原氏の專權：第十五朝臣の榮華と文化：第十六武士の興起：第十七院政武士の勢威：第
第十八平氏の驕奢：第十九鎌倉幕府の創設：第二十北條氏の民政：第二十一元寇：第二十二鎌倉時代の文化：第二十三北條
氏の滅亡：第二十四建武中興：第二十五吉野朝廷：第二十六室町時代の盛時：第二十七關東管領：第二十八室町幕府の衰微：第
廿九室町時代の文化：第三十京都の疲弊：第三十一戰國時代の大勢：第三十二邦人の海外渡、西洋人の渡來：以上

東京市神田區 大田行發館 ■ 振替貯金口座 東京市神田區 表保町七番地

奈良女子高等師範學校訓導 櫻井祐男氏新著

忽六版

生を教育に求めて

四六判最上製美本
全壹冊六百餘頁
正價金
貳圓八拾錢
送料十八錢

著者曰く私はよほどの眞摯と敬虔をもつてこの書を私の同伴の士たる天下幾萬の青年教育家諸君に捧げたいと思ふ。主人公欲一は人生の寂寥さに悶えながらも尙ほ己が生の審美と優越に深き固き信條と信念を有ち教育を以て己が人生生活と思料し其生活的顯現の爲に日夜の赤誠を致さうとしてゐる。而かもそこに總てを捨て、總てを獲ようとする矛盾撞着のたゞ中に仁正立ち奮激してゐる彼が性格の強き弱きが思れるであらう。その強き弱きから来る彼が生の懊惱の約略の解決は解決のままに未解決は未解決のままに必ずや讀者諸君の人生の上は何等かの示唆と感奮を齎すであらう—ことを疑はない。

東京美術學校教授 白濱 徵序 宮本幸惠氏新著

最新刊

行詰つた現代の圖書教育

四六判最上美本
全壹冊四百頁
正價金
貳圓參拾錢
送料十八錢

最近の文化生活教育。就中圖書教育を以て最も行詰れりと言ふ。自由畫の脅威クシヨシヨシ。藝術教育・標榜も吾人は何物を得たか走馬燈の如き現時圖書科の動搖反覆多岐紛糾新說異論に送迎續弄せらるゝ吾人の繁忙に實に渾沌たる此一大渦運動は果して行詰れりや否や、永遠確固たる普遍的妥當の眞理的根本的圖書科の理想の「現實化生活化」こそは吾人の今や均しく渴望する當面の問題である此書に依つてのみ只解明せられる秘密である。

東京市神保町七番地 大行發館同大 振替貯金口座 東京八七番

東京豊島師範學校教授 栗原寅治郎氏新著

拾貳版

教材改造世界地理精説

菊判最上製美本
全壹冊七百餘頁
正價金
五圓八拾錢
送料廿七錢

（世界の大勢に通じ列國の形勢を明かにするもの）は地理科の任務なり。外國地理教授の目的は世界を對象として自國の地位を明かにし世界の眼識の上で國民的自覺を喚起し之れに於て眞に着實なる國民的活動を奮起せしむるにあり本書の實狀を詳かにして専ら今後の國民として國家的生活を奮むるに十分なる資料を集むるに努めたり内容は教授の要旨・教具の準備・教材の解説・挿畫の描畫の說明・教授上の注意の六項に分ち殊に教材の解説と參考附説とは自然人文の兩方面の關係を精査して充分に具體化し兒童の求知心を満足せしむべく以て取扱者の便宜に供せしむるに外國地理教授の指針としては現今では本書を以て第一とす

東京豊島師範學校教授 栗原寅治郎氏新著 (好評激甚)

六版

日本産業地理精説

菊判最上製美本
全壹冊五百頁
正價金四圓
送料十八錢

（産業の研究は國家の急務也）大戦後の世界各國は舉つて經濟上の恢復に努め、國民經濟の根本を究めて之が永遠の大計を樹てんとす。大戦中幸ひに異常の進展を遂げて一躍世界の舞臺に上れる我國の經濟界は果して更に激烈なる國際的の平和戦に服すべく豊富なる準備最善の努力とを覺悟しつゝありや。本書は我國の主要産業なる農・林・漁・礦・工・商等の各業に就きて古來發達の過程を明かにし内地及び新領土に於ける新業伸張の現勢を詳述して一般實業家の參考に供すると同時に中等程度に於て諸學校及小學校に於ける地理教授の資料と爲し得る誠なる良書たるを確信す

東京市神保町七番地 大行發館同大 振替貯金口座 東京八七番

（哲學研究の必用参考書）

◇大關増次郎氏新著◇（初版再版盡く賣切増刷出來）

三版 カント研究

菊判最上製美本
全壹冊壹千頁
正價金
七圓八拾錢
送料卅六錢

哲學研究者がカントへの隨一の手引書!!

いはゆる自然界に動搖する人が感情的自然と歴史的文化とを統一する眞の人間となること
これ哲人の行でなければならぬ。哲人カントの行への復歸は近代に於ける自然主義的な諸
機構の轉回であり同時に新理想主義の出發であつた。諸方面に於ける新カント學派に依つ
て企てられた。そして企てられたカントよりの超出はそれ等が如何に多くの新契機
を含むにもせよ。尙カントの行を顧みることなくして不可能である。プラトンのイデアの
世界が永遠の意味を有つ限りカントの業績は永恆の相に於ける眞理への希望であらう。こ
の書が哲人の道を行ずる我が眞の友にとつて幾何かの光を投ずるならば著者の望みは足る
（著者）

好評 激評 甚斑

萬朝報批評：批判哲學の創開者として近世哲學史上に巨木の如く聳立つカントの哲學の體系をその思
惟開展の順序に従ひ考究検索したもので本篇を（一）批判哲學の根據づけ（二）自然形而上學（三）道義の形而
上學（四）宗教哲學（五）判斷力批判の五篇に分ち更にそれを部・編・章に分類して微に入り細を穿ち徹底的に
哲學者の當然たる哲學體系を探究し盡してある總頁數壹千頁尤然たる大冊であつてその量から云ふても
近來稀れに見る出版であるカント二百年の記念出版としてその名に反かざる優れた著述である。……
大阪毎日新聞批評：近代思想のことくくが或はカントを批判し或はカントを祖述しないものは無いの
であるから近代思想を極めるものは必ずカントまでさかのぼらなければならぬ本書はそのカントに達す
るよき手引書として薦める。

座口金貯替振 行發館同大 區田神市京東 地番七町保神表

◇市川一郎氏譯著◇（最も平易なる哲學概論）

最新刊

高尚なる理論を 平易に講義せる 哲學概論

菊判最上製本
全壹冊五百餘頁
正價金
四圓八拾錢
送料十八錢

眞に自ら哲學せず
には居れぬ眞面目
なる初學者の同伴
たる事を期す

本書はフレッツァ博士の原書を譯補せるもので内容は用語の簡潔にして平明
なるは勿論 吾々各自が日常屢遭遇する所の經驗を例證として講述し眞面目なる初學者
をして毫も難解に失望せしむる所が無い煩雜無味なる哲學的知識の押賣を事とする 從來
の類書に依て充されざる人々は速に本書に就て自家内心の深奥なる要求
を満足せしむべきである。

◇文學博士 波多野精一序・野村隈畔氏著◇（定評ある名著）

●ベルグソンと現代思潮（八版） 金貳圓五拾錢 送料十二錢

本書はベルグソンと現代思潮との關係現代思想評論と見ることが出来る。内容は現代の哲學及生活の
梗概を述べたものであるが、獨りベルグソン哲學の思想を中心として、現代の哲學及生活の
學の特色と價值とを學び得るのみならず、弘く哲學的思想を解する上に於ても亦尠か
らざる價值がある。文章は一度之を手には知らず讀みしむる間に讀了せしむる魔力ある 文體に依つたので感興殊
に深い近來絶無の良書として江湖にすゝめる。——（六合雜誌評）——

座口金貯替振 行發館同大 區田神市京東 地番七町保神表

教育哲學の研究 稻毛詛風著 四圓五拾錢 送料十八錢		教育者のための哲學 稻毛詛風著 貳圓五拾錢 送料十八錢		創造本位の教育觀 稻毛詛風著 四圓八拾錢 送料十八錢		現代教育の主潮 稻毛詛風著 貳圓八拾錢 送料十八錢		哲學入門 稻毛詛風著 壹圓六拾錢 送料十二錢		カント哲學批判 大關増次郎著 正價金貳圓 送料十二錢		最新認識論講義 市川一郎著 壹圓五拾錢 送料十二錢		自 我 論 紀 平 正 美 著 貳圓參拾錢 送料十八錢		改訂人格の力 紀平正美著 壹圓八拾錢 送料十二錢		倫理學序論 金子幹太譯 貳圓五拾錢 送料十二錢		獨逸教育の眞髓 大ベルリンの教育 林 鎌次郎著 參圓五拾錢 送料十八錢			
（歴史地理科用書）		大日本歴史 高橋與惣一著 七圓五拾錢 送料廿七錢		東洋通史 中村久四郎 共著 五圓八拾錢 送料廿七錢		西洋通史 小林 博著 六圓八拾錢 送料十八錢		讀史餘論 新井白石著 正價金貳圓 送料十二錢		國史教授の原理 實 德 重 濤 吉 著 正價金八圓 送料廿七錢		改造世界地理精説 栗原寅次郎著 五圓八拾錢 送料廿七錢		大日本地理精説 上卷 栗原寅次郎著 五圓八拾錢 送料廿七錢		大日本地理精説 下卷 栗原寅次郎著 五圓八拾錢 送料廿七錢		日本産業地理精説 栗原寅次郎著 正價金四圓 送料十八錢		郷土地理の研究 栗原寅次郎著 正價金貳圓 送料十八錢		地理學通論 地文學部 三村信男著 六圓八拾錢 送料廿七錢	

四書講義 大學 宇野哲人著 貳圓參拾錢 送料十八錢		四書講義 中庸 宇野哲人著 貳圓八拾錢 送料十八錢		四書講義 語解 義 教育學術會著 貳圓八拾錢 送料十八錢		四書研究 教育學術會著 正價金貳圓 送料十二錢		支那哲學史講話 宇野哲人著 貳圓八拾錢 送料十八錢		支那哲學の研究 宇野哲人著 貳圓八拾錢 送料十八錢		支那哲學の傳 選 釋 龍澤良芳著 參圓八拾錢 送料十八錢		（國民道德・教育大意科用書）		國民道德要領 明治教育社著 貳圓五拾錢 送料十八錢		教育大意 明治教育社著 貳圓五拾錢 送料十八錢		教育勅語解義 教育學術會著 正價金貳圓 送料十二錢		國民道德問題解答 教育學術會著 壹圓八拾錢 送料十二錢			
（家事理科其他各科用書）		生理衛生 授 理論實際 井上金輔外三名 正價金四圓 送料十八錢		化學工業講話 西川 裕著 貳圓八拾錢 送料十八錢		日常飲食物の知識 島田慶一著 正價金貳圓 送料十二錢		獨學研究者の 山田 耕著 壹圓八拾錢 送料十二錢		英語科研究者の 伊東勇太郎著 正價金貳圓 送料十二錢		珠算教授法精義 岡 千賀雄著 四圓五拾錢 送料十八錢		美的パステル畫の實驗 中谷芳藏著 壹圓八拾錢 送料十二錢		各科受驗者の手引 文檢研究會著 參圓五拾錢 送料十八錢		分類的算術解法の研究 宗 末治著 壹圓六拾錢 送料十二錢		經濟的國史教授原義 德重重吉著 正價金貳圓 送料十八錢		土地爭奪史論 阪上信夫著 正價金貳圓 送料十二錢		變態心理の研究 中村古峽著 貳圓五拾錢 送料十八錢	

教科知識普及の及しき今日各人必読の書

文部省通図書認定

最新文化基調 化學工業講話

四全一册 最上正金 美百價八圓貳金 本頁錢八十送

本書は著者が先に各種團體に於て講話せるもので著者の化學工業に關する深き造詣はよく現代化學工業の精神を握りて之れを説明するに或は趣味津津たる文を揮み或は未だ知られざるローマンスを以てす、加ふるに平易にして洗練される流麗の筆致は播種するものをして巻を捲ふ能はざらむ。教育家青年指導者學生諸君の好參考書たるは勿論本書は實に現代生活基調を理解せんとする一般人士にも必讀の要書なり。

(内容目次の一斑) 化學工業の領分とその沿革 化學工業の範圍……化學工業の原理は何か……發達の跡……展開しつつある化學工業 空中の寶 窒素の利用 生か死か……智利硝石……人智は無限……空中の寶庫……世界の大事と我國 固定方法 硝子工業 漂流の恵……七寶の一に數へられた……日本の現況……硝子の生體……硝子になるまで……生活と硝子 臺所の石灰瓦斯 石灰瓦斯の來歴……家庭に於ける瓦斯……文化生活と瓦斯……動力に便はれる瓦斯 誰護の一代 今日の護謨工業……護謨の加工仕上……皮より革へ……革の種類……製革工業の過去と現代……砂糖 砂糖が藥……文化生活と砂糖 石鹼物語 石鹼の生立ち……日常使用の石鹼……石鹼の良否 最近の色素工業 天然染料の驅逐……コールドカラーから色素……復讐な人造藍の製法……色素の人類奉仕 衣服の染色 染まる理由……染料の妙味 セルロイド人形 セルロイドの長所と現況……原料の献立……製造の梗概……セルロイドの世界 人造絹糸 人造絹糸の發見……人造絹糸の應用と現在 製紙工業……日本酒……麥酒の醸造……食鹽の話 山の食鹽と海の食鹽……食鹽は工業の基礎 燐寸 燐寸發見の序幕……我國の燐寸工業……セメントとコンクリート……セメント工業の現況……鐵筋コンクリート 陶磁器……電鍍工業……電鍍の意味……電鍍の役 香料と生活 香の世界……香料の進化……香料採製の話……主なる芳香油 石油 燃ゆる水……世界の石油……石油時代來る……油田の爭奪に熱中する列強……石油の起原と油田發見方法……

東京市神田區 表神町七番地 大田發行所

文檢家事科受験者必讀の参考書出來

桐生高等工業學校教授 島田慶一氏著 (新時代の人士要求の良書)

好評家庭科學 日常飲食物の知識

四六判最上製 美本全壹册 正價金貳圓 送料十八錢

本書は吾人が日常一日も缺ぐべからざる重要な食料品の全般に亘りて其由來・沿革・原料・製造法・營養價值・貯藏法・鑑定までも平易に簡明に何人にも了解し得る様講話せるものにして先に婦人公論紙上に續載して絶大の好評を博せしもの今や新装して讀者に見ゆ、新時代の意義なる生活を生き食養の研究をせんとする一般家庭は勿論各學校の家事科理科の教授用としても好適書なり。

(内容一斑) 第一章總論……食物とは何であるか……食品の配合……料理の話……第二章米穀類及其副製品……米と豆乳……油皮……第四章こんにやくと糸藻類……第五章果實類……果實の話……ジャム……干葡萄……白柿……第六章海菜類……昆布……紫菜と青海苔……寒天……第七章菌類……椎茸と松茸……有毒菌の見分け方……第八章乾菜の話……干菜……大根切子……第九章肉類……獸肉島肉魚肉……第十拾章鶏卵と魚卵……第十拾一章乳及乳製品……牛乳の話……牛乳……煉乳……第十拾二章調味料……漬物の話……味噌……醤油……酢……菓子……砂糖……餡……食鹽……第十拾三章嗜好飲料……日本酒……麥酒……葡萄酒……甘酒……白酒……茶……コ、アとチヨコレート……珈琲……飲料水……水……清涼飲料水の話……以上細目は略す。 (各學校通俗圖書館の必備の良書) 井上金輔氏著

井上金輔氏著

生理衛生教授の理論及實際

正價金四圓 送料十八錢

東京市神田區 表神町七番地 大田發行所

少年・少女のめたの國史辭典

我か初等教育界への一大貢獻!!

東京女子師範學校 附屬小學校訓導 守屋貫秀・山口友吉・久米慧典共著

新刊發賣

少年國史辭典

四六判最上製美本
全壹冊四百餘頁
正價金貳圓
送料十二錢

少年少女諸君が國史即ち祖國發展の事蹟を眞に自ら學ばうとするにはどうしても完備せる兒童用國史辭典が必要である。本書内容は五十音別にして國史教科書中の事實を大小漏なく解説せる外各教科に於ける史實を解明し尙御歴代表系圖・年表を附せる等眞に至れり盡せりの良書である。今や自學中心主義の教育は燎原の火の如く全國を風靡し然も教育者の之が参考書の不備を等しく遺憾とせるらるゝ時に際し我が勉學に熱誠なる少年少女諸君を初め各學校及一般圖書館の必備品たる本書を提供し得るは大に弊館の誇とする所である。

- 守屋貫秀著 ●少年會我物語 (三版) 四六判最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢
- 守屋貫秀著 ●綴方學習の泉 (三版) 四六判最上製 正價金貳圓 送料十二錢
- 森山右一著 ●和歌俳句自習讀本 (新刊) 四六判最上製 正價金貳圓 送料十二錢
- 福田正夫著 ●童謠・民謠・詩傑選集 (拾版) 袖珍判最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢
- 井上康文著 ●

東京市神田區 大田發行所 表神保町上番地
振替 東京 貯金 七八番
金口 貯金 七八番

〔教育實際參考書〕

- 行詰現代の圖畫教育 宮本 幸惠著 貳圓參拾錢 送料十八錢
- 美的バステル畫の實驗 中谷 芳藏著 壹圓八拾錢 送料十二錢
- 性慾教育の研究 羽太 銳治著 正價金參圓 送料十八錢
- 變態心理の研究 中村 古峽著 貳圓五拾錢 送料十八錢
- 活動寫眞と教育 中澤 美治著 正價金貳圓 送料十二錢
- 珠算教授法精義 岡 千賀衛著 四圓五拾錢 送料十八錢
- 算術教授資料の根本的研究 大井 全平著 參圓八拾錢 送料十八錢
- プロジエクトに依れる算術教授 內藤孫一著 正價金貳圓 送料十二錢
- 兒童新理科教授書 寺常科 奧山禱太郎著 正價金貳圓 送料十二錢
- 修身教育要學說辭典 甲斐 一二著 參圓六拾錢 送料十八錢
- 教育哲學の研究 稻毛 詛風著 四圓五拾錢 送料十八錢
- 少年の思想と生活 前田 德一著 壹圓八拾錢 送料十二錢
- 少年國史辭典 守屋 山口著 正價金貳圓 送料十八錢
- 經濟的國史教授原義 德重 淺吉著 正價金貳圓 送料十二錢
- 高等小學國史教授要訣 富山 周正義著 五圓八拾錢 送料廿七錢
- 國民道德要領講義 三浦 藤作著 貳圓八拾錢 送料十八錢
- 教育大意講義(教育史) 三浦 藤作著 正價金參圓 送料十八錢
- 教育學術問題批判 渡部 政盛著 貳圓八拾錢 送料十八錢
- 生を教育に求めて 櫻井 祐男著 貳圓八拾錢 送料十八錢
- 若き教育者の自覺告白 稻毛 詛風著 壹圓八拾錢 送料十八錢
- 小學修身書原據の研究 鴉田 惠吉著 貳圓五拾錢 送料十八錢
- 養正國史教授實際 卷外 三 淺吉著 參圓五拾錢 送料十八錢
- 養正國史教授實際 卷下 三 淺吉著 四圓五拾錢 送料十八錢

〔哲學・文藝書類〕

哲 學 入 門 稻毛 詛風著 壹圓六拾錢 送料十二錢	西洋哲學史講義 高橋 敬視著 參圓八拾錢 送料十八錢	高尚なる理論を平易に講義せる哲學概論 市川 一郎譯 四圓八拾錢 送料十八錢	カント 研究 大關増次郎著 七圓八拾錢 送料卅六錢	カント哲學批判 大關増次郎著 正價金貳圓 送料十二錢	改訂 オイケンの哲學 稻毛 詛風著 壹圓六拾錢 送料十二錢	ベルクソンと現代思潮 野村 隈畔著 貳圓五拾錢 送料十二錢	タゴールの哲學文藝 吉田絃二郎著 貳圓五拾錢 送料十八錢	最新哲學辭典 渡部 政盛著 五圓八拾錢 送料十八錢	教育の基礎たる哲學 市川 一郎著 貳圓五拾錢 送料十八錢	教育者のための哲學 稻毛 詛風著 貳圓五拾錢 送料十八錢	感想生の悲劇 吉田絃二郎著 壹圓八拾錢 送料十二錢	感心から心へ 吉田絃二郎著 壹圓八拾錢 送料十二錢	想生くる日の限り 吉田絃二郎著 壹圓八拾錢 送料十二錢	想 麥 の 丘 吉田絃二郎著 壹圓八拾錢 送料十二錢	小説生命の微光 吉田絃二郎著 正價金貳圓 送料十八錢	小説集島 の 秋 吉田絃二郎著 壹圓八拾錢 送料十八錢	現代文學新選 石川 誠編著 四圓八拾錢 送料十七錢	現代詩歌新選 石川 誠編著 貳圓八拾錢 送料十八錢	現代田園文學新選 古屋 利之著 正價金貳圓 送料十二錢	童謡詩傑作選集 福井上 康文著 壹圓八拾錢 送料十二錢	和歌俳句自習讀本 森山 右一編 正價金貳圓 送料十二錢	少女白ばらの公子 大久保 龍著 壹圓八拾錢 送料十二錢
-------------------------------	-------------------------------	--	------------------------------	-------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---------------------------------	------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------

263
320

終